審査の結果の要旨

氏名　宮田まり子

本論文は、保育教材として歴史的に古くから多くの園に普及している積み木について、幼稚園入園１年目の３歳児クラスにおいて、幼児がどのように積み木を介して他児と相互行為を行うのか、その相互行為は時期と共にいかに変化していくのか、またその場面での保育者の支援の在り方に関して、幼稚園における自由遊びでの積み木場面の観察にもとづき検討した研究である。論文は３部７章から構成されている。

第Ⅰ部第１章では、積み木を介した相互行為に関連する先行研究として、３歳児期の発達特性と園での３歳児の相互作用の特徴、積み木研究と積み木遊びが発達の諸側面に与える効果を概観し、積み木遊びに関与する要因を整理している。そして第２章では、第１章で導出された課題をもとに、本研究の目的として、相互行為の生成過程を積み木の特性と保育者の言語的・身体的支援との関係から明らかにすることを論じ、第３章では、観察データの収集と分析の方法を説明し、２年間９２日間の３歳児学級の観察事例にもとづく分析である点を述べている。

第Ⅱ部第４章では、入園１週間後から１年間の観察をもとに、積み木場面に見られる特徴的な１１の行為を同定し、それらの行為と発話の変容から、①積む目的の出現と相違の時期(６月-７月)、②積みあがった構築物に対するイメージの表出と共有へ向かう時期（９月-２月)、③積み上げに対する役割に関する言及がある等の協働の時期(３月)の３期に質的に区分できることを明らかにし、この期の変化に積み木の崩れが関係していることを示している。続く第５章では、積み上げた積み木が崩れるという構造の変化が行為者に及ぼす影響を４３の崩れ場面に伴う応答と行為に焦点をあてて分析し、崩れに対する肯定的応答と否定的応答は目的の有無と関連しており、肯定的応答は積み上げに対する目的が無い場合に生起し，積み手の目的が他児との場の共有にある場合は他児の応答に同調するなど、他児の行為の影響を受けることが示唆された。また，崩れを通して目的の相違が明らかになることを契機に、他児への働きかけ行為が増加することを見出している。第６章では、３歳児学級担当の４名の保育者の支援と幼児の積む行為の展開継続の関連を検討し、①幼児のイメージを膨らませ展開していく支援と、②複雑な構築を目指して展開する支援の 2 種類の支援が展開の継続を支えることを明らかにしている。特に②では，積み上げを期待する箇所に適当な形体の積み木を指示するなどの具体的行為と積み上げ後の構築物への意味付けが展開の継続に寄与する可能性を示唆している。

第Ⅲ部第７章では、これらの３研究の知見をまとめ、幼児教育研究と実践に対する本研究の意義を論じると共に、今後の理論的・方法論的課題を体系的に整理し検討している。

本論文は、積み木の崩れに着目するという研究の着眼に独自性があり、幼児教育における教材研究を実践の場に即して行う研究方法としても新たな可能性を含んでおり、教育実践へ寄与する研究として、高く評価された。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与する水準にあると判断された。